その異形、悟りをもって現世の魔を払う。

あれから四十年。
いまなら彼は、何と闘い、
何を護ろうとするのだろうか？

一九七二年、
あさま山荘事件が起こり、
列島改造計画と呼ばれた国土開発が進み、
光化学スモッグが空を覆い、
若者がしらけ世代と呼ばれたその年に、
それまでのヒーローとは完全に一線を画す
異形（いぎょう）のダークヒーローとして
デビルマンは我々の前に降臨しました。
人間の心をもった悪魔が、
人よりも人として誇り高く闘う勇姿。
やがて保身と不信から
自滅の道を辿る人類に失望し、
それでも最後の人間として、
悪魔との最終聖戦に挑み、
散っていったその姿を、
わたし達は憧憬と恐怖の入り交じった
畏敬の念をもって見つめていました。
約一年間という短い連載期間に描かれた
濃密な傑作エピソードの数々は、
いち早く、文明社会の混沌を予言し、
人間そのもののあり方に
警鐘を鳴らしたのです。

そして二〇十二年。
あれから四十年が経ちました。
先の見えない不況、
天災が浮き彫りにした人災と欺瞞、
政府や有識者への不信、
未来に夢を見出せない若者達。
正義と悪が混沌とし、
情報は多面的に氾濫し、
信じられるものが見出せない状態。
それが超成熟社会と呼ばれながらも
生きていく手がかりのない
現在の世相です。

果たして我々はいま、
デビルマンが命を賭して護るに足る
「人間」となったのでしょうか？

ただ、こんな時代だからこそ、
これだけは断言できるのです。
誰よりも人間らしくあろうと闘い、
混沌の中で傷つき、迷い、悩み、
あげく裏切られながら、
それでも自分が護るべきもの、
自分が生きる意味を見出そうとした
悪魔人間（デビルマン）こそ、
わたし達にとって、信じられる人間像、
崇拝に足る存在であると。

悪魔人間 降魔成道像。

誕生から四十年――。
圧倒的な造形力と
宗教的意匠による存在感。
そして精緻な鋳造技術によって
遂に実現した、崇拝に価する到達点。

悪魔人間（デビルマン）究極鋳像。

崇拝に価する究極鋳像、
その創造のために。

新進気鋭のアーティストによる独創的な原型。
高岡銅器の伝統的鋳造技術による確かな偶像表現。
それに加え、大人の嗜好と情緒を満足させる
「悪魔人間の蘇り」には高位な価値が必要でした。
それが宗教観の付与です。
『デビルマン』が世界的に支持される大きな要因が
神と悪魔と人間による壮絶な終末世界と、
その宗教性にあることは間違いありません。
そこで、仏教において釈迦の生涯を八段階に分けた
「八相成道＝はっそうじょうどう」のひとつ、
「降魔＝ごうま」をモチーフとしました。
釈迦が苦行の末に如来となる一生は、
デビルマンの生涯と強く共鳴するからです。
仕事でも家庭でも大きな責任を問われ、
手がかりのない超成熟社会の中で
答えと決断を迫られる重荷を担う人々。
そんな成熟した大人のデビルマン信奉者が、
困難に立ち向かう勇気と強い意志の象徴として
所有していただくために
この偶像は創造されたのです。

降魔成道【ごうま・じょうどう】

仏教においてマーラ（悪魔）を降す意味。
釈迦は、開悟を妨害するマーラの軍勢を退け、
みごと成道、つまり悟りを開いたとされています。
降魔成道とはすなわち、
雑念や誘惑を退けて真実に達することを指します。
人生で直面する様々な重圧、葛藤、誘惑を乗り越え、
正しい選択や決断を行おうとすること。
真実を掴むために待ち受ける試練と
その克服を意味するのです。
それは、人の為に身を賭して悪魔と対峙し、
裏切りの中でも、闘う意味を失わなかった
デビルマンの生き様そのものであり、
混沌とした現代社会で、
家族や大切な人を守るために
日々を闘い続けるあなたの姿でもあるのです。

妥協なき、背面部の造形

両翼の裏側と背部の状態は、飾られた際に普段は隠れる部分となりますが、新たな解釈による妥協の無い造形考証がほどこされ、その見事な骨格とたわみ、そして筋肉の表現によって、これまでの闘いの激しさを饒舌に物語るようです。
その後ろ姿は、終わりなき孤独な闘いを続けるデビルマンの心情を象徴するものとして、充分に鑑賞に足る仕上がりとなっています。

坐像であることの意味

正面からは立像のように見え、闘神、守護神としての脅威を発揮する本像も、回り込むと坐像（ざぞう）であることが明らかとなります。
多くの降魔成道釈迦像が坐像であることにちなみ、本像も仏像的には善跏倚坐（ぜんかいざ）にあたる姿勢をとっています。
迫り来る会敵を前のめりに睨みつける、荒ぶる印象の正面像に対して、混沌とした情勢を憂いをたたえた表情で静観し、世情への思慮にふける、そんな達観した一面を見せてくれます。

誇り高き闘神、守護神の姿

迫り来る悪魔の軍団を降伏せんとする降魔成道の思想は、デビルマンに畏怖の対象に足る、荒ぶる印象をあたえます。
“常在戦場”“臨戦態勢”。八分ほどに拡げた翼、前傾姿勢、決意に満ちた表情。そこにある造形の全てが、闘う守護神の迫力を醸し出しています。
切り詰められた両腕は、歴史的胸像作品がそうであるように、具体的ポーズによる固定イメージから観る者の創造力を解放し、本像が象徴する存在意義を無限に拡げることでしょう。